

身延山晩年における日蓮聖人

—弘安三年三月から八月まで—

上 田 本 昌

一、弘安三年の春

宗祖五十九歳の春も、ようやく酣となって来た三月三日に、門下の日住から一通の書状が、西谷へ届いた。それは祖父妙叡の追善回向をして戴きたい旨が委細に記されてあった。宗祖は心よくこれを承諾され、「経文に是人於仏道決定無有疑⁽¹⁾。此文をひまなく御唱あるべく候。日月は地となり、地は天となるとも、此経の行者三惡道に落る事あるべからず。」と返書を送っている。この書は『日住禪門御返事』と称され、本満寺本の写本が伝っているが、奥書によると「私云、御正本品河本光寺在之云云⁽²⁾」とあるので、真蹟が存在したとも考えられる。日住がいかなる人物であったか、つまびらかではないが、「禪門」とあるので「宿屋禪門」と同様に、在家の身でありながら剃髪して宗祖の門に入り、仏道を修行した者であつたらうと推察できる。禪定の門に入って修行する者の意であり、必ずしも禪宗の門徒を指すものではない⁽³⁾。

八日には故上野殿の忌日に際し、子息から僧膳料として米一俵が送られて来た。宗祖は早速にその御返事を記して

いる。本満寺本の写本が遺されているが、食糧事情の厳しい当時にあって、米一俵のご供養はたいへんなものであったにちがいない。「御仏に供しまいらせて、自我偈一卷よみまいらせ候べし。」とあり、従来の「法華経・釈迦仏」の御宝前という表現よりやや趣を異にしている。親の追善供養をすることの大事を説き、阿闍世王や波瑠璃王の故事を示し、外典の孝養は現世に限って後生をたすけず、更に仏道においても四十余年間の教えは、わずかに六道を離れしめるためのものであって、真の孝養とはいえない。しかるに法華経に來り、孝養第一の教えが説かれたことにより、多宝仏を始め十方の諸仏が集って「一切諸仏の中には孝養第一の仏也」と定められたとし、その法華経を信ずる貴辺は「日本国第一の孝養の人なり」と称している。

四月に入って十日には、富城入道から鷲目一結が送られて來た。「御志者奉申法華経候了。定十羅利守護御身無疑歟。」とあって、ここでは法華経に申し上げている。前書は親の追善のためであるので「御仏に供し」と記し、本書のように通常の布施については、「法華経に申し」十羅利の守護あることを述べられている一例とみることができよう。又「十羅利の守護」とある点から、恐らく十羅利を守護神として、勧請していたか、若しくは、曼荼羅が掲げられていたことであろうと考えられて來る。真蹟は二紙完で中山に所蔵され重要文化財に指定されているが、二紙目には「さて尼御前乃御事をぼつかなく候由、申伝させ給候へ。」とある。本書は『日祐目録』によると、「尼公所勞御歎由事」と題されている如く、富木氏の夫人が病床にあることを心配して、慰められたことを付け加えられたものである。尚、本書については、立正安国会編の『日蓮大聖人御真蹟対照録』によると、系年を弘安四年の四月十日とする説を立てている。

さて、宗祖はこの三月と四月の二か月間で十四幅の曼荼羅本尊を、門下に授与されている。『日蓮聖人真蹟集成』

によつて見ると、先づ三月の凶頭を見るに、玉沢の妙法華寺に所蔵されている曼荼羅で、授与者は不明である。右下部の授与書の「日」の字の下を削除してあるため、「日□授与之」とあり、誰に授与されたか詳かでないが、『玉沢手鑑草稿』によると「此本尊ハ日伝上人上京折、勝劣一切ニ依テ妙頭寺ヨリ附与也、此時日号ヲ切テ渡歟。」とあって、削除のいきさつを推論している。特徴としては「菩薩」の文字が、「卍」の書体をもつて書かれている。次は湖西市鷺津の本興寺に所蔵されているもので、沙弥妙識に与えられた御本尊である。この頃の曼荼羅になると、不動・愛染の二梵字が大きく、縦にほぼ全紙の長さで、雄大に書写されている反面、四大天王は見えない。次ぎは千葉市の随喜文庫に所蔵されている御本尊で、授与者は日安女である。また同じく三月の凶頭で、現在鎌倉妙本寺に所蔵されている「臨滅度時御本尊」があり、別に「蛇形御本尊」とも称されている。これは宗祖が池上でのご入滅時に、床頭へ掲げられたものであって、『別頭統紀』によれば、「大曼荼羅蓮字、長画写ニ竜蛇勢、人呼為ニ蛇形、曼荼羅、後高祖入涅槃之時向^レ是而坐故又云臨滅度時、大曼荼羅、今存^ス比企藏中^ニ」と記されている。いかにも「蓮」の字の^レ（シンニョウ）が、蛇形をしているところから、この名が付けられたものである。丈六一・五櫃、幅一〇二・七櫃と大幅である。次に三月凶頭の曼荼羅がもう一幅ある。これは『御本尊集目錄』によると、「右下隅に授与書の存したのを、截落した形跡がある。」とある通りで、授与者名は不明である。

卯月に入ると十日付で「尼日実授与之」の曼荼羅がある。鎌倉妙本寺の所蔵であり、珍らしく「十日」という日付が記されている。たいがい「卯月日」とあるように、月は明示されていても、日付は不明なものが多いのが通例である。次は京都妙覚寺に所蔵されている曼荼羅で、これも授与者名を記された部分が削損された形跡があり、だれに与へられたかは不明である。大村市本経寺に所蔵されている卯月凶頭の曼荼羅も、授与者のところが「俗□□□」と

なっていて不明である。これは表具の際に截落したものとみなされている。¹³ 近江八幡市妙感寺の曼茶羅も卯月の染筆であり、「卯月日」とある日付のすぐ下に「日妙」と記されている。日妙に授与されたものと考えられるが、前の本經寺の御筆と比較すると、やや四天王と梵字が細くなっており花押も細目になっている。次に身延山久遠寺蔵の一幅がある。これはもと本阿弥家に伝来していたものであったが、昭和十年に加治さき子氏の篤志によって、身延山へ奉納されたものであると言われている。¹⁴ この御本尊も右下に授与者名があったのを削損した跡が見られる。書体も全体的に調っていて、典型的なものといえるが、諸尊の中には省略されているもの（例えば文珠普賢・阿修羅・阿闍世王等其の他）がある。これに対し京都本法寺蔵の御本尊は、十界勧請の形をとり諸尊が備っている。これは右下に「優婆塞藤原広宗授与之」と明記されて、授与者をはっきりしている。この場合は大広目天王の左内側に記されているため、表装の際の削落等からまぬがれたものであろう。次は京都妙頭寺蔵のもので、同じく卯月の染筆によるものである。これは左下の大増長天王に添って「尼日嚴授与之」とある。この尼日嚴については、『仏祖統紀』によれば、駿州富士郡の高橋入道の妻であるとしているが、先きに建治二年二月の項で挙げた尼崎本興寺蔵の曼茶羅には日興の添書で、「高橋六郎兵衛入道後家持妙尼」とあるから、ただちに『統紀』の説にしたがうわけにはいかない。次は「卯月十三日」と日付の明記された曼茶羅が京都の本圀寺に所蔵されている。左下日付の脇内側には「盲目乗蓮授与之」とある。乗蓮については黙阿良忠の弟子行敏であるとする説もある。¹⁵ 又染筆の日付は不明であるが、この頃のものと考えられる一幅が同じく本圀寺にある。これは図頭の様式が一変しており、首題の左右に「今此三界皆是我有云云」と経文が書かれ、右下部に「日蓮花押」が大きく掲げられている。従って通称「今此三界御本尊」とも呼ばれている。このように三・四月の二か月間で十四幅もの曼茶羅が図頭されているということは、それだけ西谷へ檀信徒や弟子

達の出入りがあったことを示すものであり、特に四月は八幅の多きにのぼっている。いかに四月の西谷が盛況であったかを物語っているともいえる。宗祖は教多くの曼荼羅を図顕されているが、現存は一二三幅に及んでいる。その中弘安三年中には三十幅があり、全体の四分の一に当る曼荼羅が、この年に染筆されているのである。しかもその中の十四幅が三・四の二か月中に集中しているのである。

二、弘安三年の五月

駿河の妙心尼から、「すず（種々）のもの」が送られて来た礼状が、五月四日付で記されている。⁽¹⁷⁾折りしも農繁期で人手の大切な時に、ご供養の品々を届けてくれたのは、ひとえに故入道殿の後世をとぶらう為のものであるが、さぞ悦しく思っておられることであろうと、妙心尼の供養をねぎらうと同時に亡き入道の心も推しはかっている。真蹟は伝っていないが日興の写本が富士大石寺に所蔵されている。妙心尼は前にも出て来ているが、夫入道の病氣中から宗祖に帰依し、入道の亡き後も熱心に信仰を進め、西谷へもご供養を重ねている。蘇武や安部中磨呂の故事を引き、更に「妙」の一字について「三十二相八十種好円備せさせ給ふ釈迦如来」であるとし、妙の説明をしている。即ち、妙は「仏にておはし候」というのであるから、「妙法」といえば「仏と法」ということになる。その上、如意宝珠の如く、一切の功德を合せて「妙」の文字としたのであると記している。題目を唱えることにより、仏と法の一切の功德を得ることができるという意味に解することができる。最後に「はわき殿申させ給へ」と付記されているので、妙心尼と伯耆殿（日興）との信仰上におけるつながりを知ることができる。尚、この御書は『録内御書』の中では、「妙字御消息」と題されている。

同じく五月の十八日には、妙一尼に宛た書簡が一通ある。妙一尼については、つまびらかでないが、「妙一女」とも「妙一比丘尼」「さじき尼」等とも称されており、日昭との関連、或いは日妙とのつながりがあるともいわれている。妙一尼の夫は宗祖が佐渡在島中に、殉教したようである。⁽¹⁸⁾ この御書では、「夫、信心と申すは別にはこれなく候。妻のをとこをおしむが如く、をとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに、法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて、南無妙法蓮華経と唱えたまつるを信心とは申し候也。」⁽¹⁹⁾と信心についての解説をわかり易くしている。ここでも信の対象について、「法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏菩薩・諸天善神等」となっている。

二十六日には富木殿御返事が記されている。この書は『諸経与法華経難易事』といわれ、真蹟は十紙完で中山に所蔵されている。法師品の「難信難解」についての解説がなされ、随他意の教えは易信易解であるが、随自意の教えは難信難解であるとし、法華経は随自意の教えであるから難信難解であると説いている。又諸経は「譬へば水随器方円象随敵出力」と⁽²⁰⁾であるが、法華経は八部四衆皆一同に演説している旨を明からにし、最後に「幸我一門随仏意自然流入薩般若海」⁽²¹⁾と結論を下している。恐らく富木氏が法華経の難信難解なことについて疑問に思う点を質問して来たことに對する御返事として記されたものであろうと考えられる。宗祖は常にこうして西谷に在りながらも各地に在る檀越信徒からの疑問に答えつつ、更に教化を機会ある毎にされていたのである。

三日後の二十九日には、新田四郎竝に女房御方への御返事一紙十一行が記されている。真蹟は富士大石寺に在るが、「使御志無⁽²²⁾限者歟。」という言葉で始り、「檀那一願必成就歟。」という語で終っている。新田氏が或る一願を成

就するよう申し出て来たことへの御返事であると考えられる。「經法華經頭密第一大法也。仏釈迦仏諸仏第一上仏也。行者相三似法華經行者、三事既相応。」とあるが、この「三事」とは法華經・釈迦仏・行者の三を指しているもので、この三事がすでに「相応」しているという点に注目すべきであろう。即ち仏・法・僧の三事相応ということになる。本仏・本法・本僧の三事と云うべきであろう。「相似たり」と云う表現をしているが、「相応せり」という語から考えれば、「法華經の行者」即「仏使」たることをもって、「本仏・本法と相応」したことを明らかにしたものといえよう。

三、弘安三年の六月

さて、六月に入ると二十七日に、あわ(粟)のわさご(早稲)を窪尼が届けて来たことに對し、御礼状が記されている。窪尼については前にもふれた通りであるが、持妙尼(戒号)とも呼ばれ富士郡に在住していた。この書は日興の写本が大石寺に所蔵されている。仏弟子の阿那律について述べている。前世に稗の飯を辟支仏に供養した功德により、法華の会座では普明如来となられたことを挙げ、いまの比丘尼(窪尼)は粟の早稲を「山中にをくりて法華經にくようしまいらせ給。いかでか仏にならせ給はざるべき。」と述べている。辟支仏を供養した者さえも、法華經において成仏している、まして法華經に供養をまいらせた者は「いかでか仏にならせ給はざるべき」という立場から考え、いかに法華經を重要視していたかが知れよう。

また、この頃宗祖は次の通り五幅の曼荼羅を図顯されている。五月に二幅、六月に三幅で、五月の二幅は共に八日の図顯であり、一幅は沙門日華に授与されたものであって、京都本能寺に所蔵されている。右下の大広目天王の脇に

「大本門寺重宝也」とあり、更に左下の大増長天王の脇に「甲斐国逆華寺住僧寂日房者 依為日興第一弟子所申与之如件」と日興の派書が見られる。もう一幅は沼津の妙海寺に所蔵されており、これは授与者不明である。

六月の一幅は「俗日円授与之」とあり、小浜長源寺に蔵されている。二幅目は「俗藤原国眞法名日十授与之」とあって、京都本法寺に在る。もう一幅は「俗日肝授与之」とあり、愛知県の実成寺に所蔵されている。この六月の三幅は共に梵字が大きく紙の長さ一杯に記されている。こうして宗祖は毎月数名の信徒らに曼荼羅の授与がなされていたのであった。西谷を訪れる信徒の数は恐らくこれ以上であり、「曼荼羅授与」をされない信徒の数をも含めると、雪の消えた頃から秋の終り頃へかけて、草庵の出入りは相当の数に上ったものと考えられる。

四、弘安三年の七月

蟬の声もやかましく、暑さの増して来た七月の二日には、大田殿女房から「八月分の八木一石」が送られて来た。その御礼状が中山に保存され重要文化財の指定を受けている。二十一紙にわたって「即身成仏こ」に関する法門の解説を行っているので、中山の日祐の目録によれば『即身成仏事』と称されている。諸大乘経・大日経等で即身成仏ということを説いているが、「此はあへて即身成仏の法門にはあらず」と諸経の即身成仏を否定し、法華経の「二乗作仏」によせて、「釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹菩薩・天台・妙楽・伝教大師は、即身成仏は法華経に限るとをほしめられて候ぞ。我弟子等は此事ををもひ出にせさせ給へ。」と眞の即身成仏は二乗成仏と久遠実成を説いた法華に限ることを明らかにしている。「即身成仏」を明解に打ち出された御書として、特に重要な一書といえる。靈山浄土への往詣を主として教示される傾向の中にあつて、本書は即身成仏を専ら解説されている点に注目すべきであろう。

大田殿の女房が即身成仏に関する質問をして来たことに對する解答とも考えられるが、富木・大田・曾谷といった開宗後間もなく入信した古くからの信徒に對する教示と、比較的新しく入信して来た信徒への教示とは、教化方法の上に頓漸・緩急の跡を窺うことができるといえよう。尚、本書は一説には建治元年の述作であるとする説もあるが、⁽²⁶⁾ここでは『昭和定本遺文』に従って弘安三年説を採った。

同じく七月二日には、千日尼からも鷲目一貫五百文・海苔・若布・干飯等の品々が送られて来た。「法華經の御宝前に申上げて候」⁽²⁶⁾と法華經の御宝前に供えられたことが記されている。この文に統いて「法華經云、若有聞法者、無一不成、仏と云云。文字は十字にて候へども法華經を一句よみまいらせ候へば、釈迦如来の一代聖教をのこりなく読むにて候なるぞ」とある。釈迦如来によつて説かれた一代聖教の中で、最も中心となるのが法華經である。この法華經の一句を読めば他の聖教を残すところなく読んだのと同じ功德をえられ、一人として成仏しない者はないと云うことになる。これは大田殿女房に与えられた前書にもある通り、二乗成仏・久遠実成の法門が説かれているので、「即身成仏は法華經に限るべし」という教えと歸するところは同一とみることができる。

ところで宗祖は、しばしば「法華經の御宝前」という表現をされているが、これについては、(1)法華經は釈迦如来によつて説かれた經典の中で、最も中心骨髄になる經典である。という前提に立ち、(2)その法華經の中には久遠実成の本仏釈尊が説き顯されている。という事実⁽²⁷⁾に即して、「久遠実成」が顯説されたことにより、二乗成仏も一念三千の法門も「まことの法門」として活かされて来るのであるという立場から、「久遠実成の本仏を説き顯した法華經」の「ご宝前」という意味であると考えられる。従つて宗祖が使われた「法華經の御宝前」とは①久遠実成の本仏釈尊が顯説された法華經。②二乗成仏の説かれた法華經。③事の一念三千の説かれた法華經。という意味をもつた法華經

であり、換言すれば「法華經の御宝前」とは、「久遠本仏開頭の法華經の御宝前」ということであり、「本仏・法華經の御宝前」と同じ意味をもったものと考えられるのである。これは法華經が最位第一の經典といわれる所以は、二乗作仏・久遠実成の二大法門を説き示しているからであるとする『開目抄』の説から考えても首肯できよう。例えば『種種物御消息』には「すゞの物給て法華經の御飢をもつき、釈迦仏の御いのちをもたすけまいらせ給ひぬ⁽²⁹⁾」とあり『芋一駄御書』には「法華經に申しあげ候ぬれば、御心ざしはさだめて釈迦仏しろしぬらん⁽³⁰⁾」とあって、爰では法華經を資ける者は釈迦仏を資けることになるのであり、法華經に帰依する者は同時に釈迦仏に帰依することと同一であるともなしているのである。又『四条金吾殿御返事』には、「法華經の御宝前に申し上て候。定めて遠くは教主釈尊竝に多宝十方の諸仏、近くは日月の宮殿にわたらせ給ふも、御照覧候ぬらん⁽³¹⁾。」とある。この場合の法華經もまさしく、諸經の枢要として、教主釈尊を始め、多宝十方の諸仏から日月等の守護神に至るまで、總ての諸仏諸神が来集されたところの「法華本門靈山会上の説相」を指しているものと解することができる。従つて宗祖が檀信徒からのご供養に対して記された御礼状の中ししばしば書かれている「法華經の御宝前」と云う場合の法華經は、單なる經典の一つとして扱われているものではなく、久遠実成の本仏釈尊を始めとして、多宝十方の諸仏、及び守護の諸天がすべて雲集した「靈山会上」において、説かれている法華經を指すものであると解することができる。

このため「法華經に申しあげ」ることは、直に「釈迦仏しろしぬらん」と云う同時性をもったものとして考えられるのである。法華經の飢を資ける者は同時に釈迦仏の命を資けることにつながるものとする考えもここから発するものと云えよう。即ち、先きの『妙心尼御前御返事』にも示されている通り、妙法蓮華經の「妙」の文字は、釈迦如来であり、「仏にておはし候」というのであるから、「法華經の御宝前」といえば、「釈迦仏・法華經の御宝前」と云うの

と同じことであると考えられるのである。

さて、『千日尼御返事』ではこのあとに次のような周知の一文が記されている。「故阿仏房の聖靈は今いづくにか
をはずらんと人は疑ふとも、法華經の明鏡をもって其の影をうかべて候へば、靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、
東むきにをはずと日蓮は見まいらせて候。」⁽³²⁾とあり、此の事は「そらごと」では断じてないことを強調している。阿
仏房の聖靈が現在どこに在るかを、具体的に示している一文である。「靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むき
にをはず」とはかなり写実的と思える程の具体性をもった表現である。惟うに阿仏房の息子である藤九郎守綱は「去
年（弘安二年）は七月二日、父の舍利を頸に懸け、一千里の山海を経て甲州波木井身延山に登て法華經の道場に此を
おさめ、今年は又七月一日身延山に登て慈父のほかを拝見す。」⁽³³⁾とある如く、身延西谷の御草庵近くに父阿仏房の舎
利を埋葬しているのである。宗祖は法華經の道場である身延山をもって、「天竺の靈山此処に来れり、唐土の天台山
親り^{まゐり}ここに見る」⁽³⁴⁾とすでに身延山をもって靈鷲山に疑しておられる。「靈鷲山の山の中に」という一文は、生前九十
才余の高齢をもって「一千里の山海を経て」参詣して来た阿仏房にしてみれば、この身延山はまさに「法華經の道場」
であり、本朝における「靈鷲山の山の中」そのものであったにちがいないものとして受けとめられたものと云えるの
ではなからうか。宗祖はそうした心情を察して「靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に」と女房へ記して、亡き夫の
所在を明確にされたものと考えられるのである。更に「東むきに」という一文は、これ又西谷の御草庵跡に立って、
実際に阿仏房日得上人の墓を拝すると、現在でも東むきに建立されている点から推して、恐らくその当時も東に向い
て墓が建てられていたものと考えられる。大体、庵室そのものが東向きであったと考えられる。庵室の場所は周囲が
すべて山であり、前に流れている身延川の流れに従って東のかただけが開けている地形である。宗祖にとって東のか

たは生国安房につながるものとして、望郷の念は一としお深いものがあつた。『光日房御書』には「さすがにこひしくて、吹く風立つくもまでも、東のかたと申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立ちてみるなり。」⁽³⁵⁾と云う心境を持っていたのである。東のかただけが身延川に添って展げ、あとはすべて山に囲まれた中に建立された草庵も、阿仏房の墓も、やはり東向きであつたことは当然考えられるのである。そこで「東むきにをはず」というのは墓そのものが東向きであつたことにも由来するであらう。「日蓮は見まいらせて候」という表現がここに来て、「そらごと」ではなく現実のものとして語られていることになるのである。尚、「多宝仏の宝塔の内に」とあるのは、云うまでもなく建治二年の『阿仏房御書』中に「南無妙法蓮華經となうるものは、我身宝塔にして、我身又多宝如来也。(乃至)然^レ者阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此より外の才覚無益なり。」⁽³⁶⁾と教示されたことから考えて見る時、全く一致した表現とみなすことができよう。更に付け加えるならば、伝承とはいへ、宗祖は立教開宗の折り、旭ヶ森に於て、太平洋の彼方から晝闇を破つて昇つた朝日に向い、題目を唱え法界に対して開宗を宣言したといわれている。⁽³⁷⁾即ち東方に向つての立教開宗であつた。ただ単に望郷の念のみで東方を選ばれたのでない事は、これでもわかるであらう。

次にこの御書では、千日尼に宛て女性全般に対する教化がなされている。即ち、

「をとこは柱のごとし、女は桁のごとし。をとこは足のごとし、女人は身のごとし。をとこは羽のごとし、女は身のごとし。羽とみとべちべちになりなば、なにをもんてかとぶべき。柱たうれなば桁地に墮ちなん。家にをとこなければ人のたましゐなきがごとし。」⁽³⁸⁾

宗祖は婦人に対する教化を随時なされているがこの一文も男・女特に婦人としての在り方を示したものとして著名で

ある。家庭における女性の立場が自ずと明確にされている。末文の「子にすぎたる財なし財なし」という一文と共に、銘記すべきものといえる。尚又「追申」には、絹染の袈裟を送った事・豊後房に学行精進するように伝えてほしいこと、九月十日已前に身延へ来るように伝言してほしいこと、国府入道の尼御前の事、丹波房に聖教をつかわすべきこと、山伏房に関するなどが付記されている。文中の丹波房は墨田妙福寺の開山で中老僧の一人であるが、豊後房と山伏房についてはつまびらかではない。しかし、宗祖の門下として此の頃、佐渡方面で活躍していた人材でと考えられる。宗祖はこのように門弟を随時身延へ呼び寄せては教育し、指導をされていたことがわかる。身延入山の目的が、一つには門下の教育にあったと言う事を実証する一文とも云えよう。

同じ七月の二日に、上野殿宛の御返事が記されている。真跡は現在富士大石寺に所蔵されている。「報南条氏書」「五郎書」とも呼ばれている。先ず「去六月十五日のけんさん悦³⁹入⁴⁰て候」とあるので、六月十五日に上野殿が身延を訪ねて来ていることがわかる。文意は熱原法難中に南条氏が勧めて、法華の信仰に入った神主のことが表沙汰となり、神主を免ぜられていた者を囲まっていた事に対する労をねぎらいつつ、蒙古の来襲に及び、「我等は法華経をたのみまいらせて候へば」さながら国王の一人の太子のごとく「いかでか位につかざらん」と結んでいる。当時の人々にとって蒙古来襲のことは、国を挙げての大問題であり、「ひつじの虎の声を聞⁴¹がごとし」という状態であったことがわかる。「追申」には、「人にしらせずして、ひそかにをほせ候べし」とあるので、この御返信は「親展」としてつかわされたものであることがわかる。

七月七日、七夕の日を迎えると、「きごめ(生米)の俵一・瓜籠一・根芋」等の食糧品が西谷へ届けられている。届けた主については松野氏か又は新池尼ではないかと考えられている⁴⁰。その礼状が『浄蔵浄眼御消息』として三宝寺

本が遣されている。「法華経は東方の薬師仏の主、南方西方北方上下の一切の仏の主也。釈迦仏等の仏の法華経の文字を敬ひ給ふことは、民の王を恐れ、星の月を敬ふが如し⁽⁴¹⁾」と爰では専ら仏よりも法を優先しており、妙莊嚴王品の淨藏・淨眼の例を引き、更に「くらき闇に月の出るが如く、妙法蓮華経の五字、月と露れさせ給べし。其月の中には釈迦仏・十方の諸仏乃至前に立せ給ひし御子息の露れさせ給べしと思召せ」と結んでいる。従つて子息に先き立たれた親が、その追善供養として、前記の品々を届けて来たことに対する礼状とみなすことができよう。

さて、七月十三日孟蘭盆を迎えた西谷へ、「鑿牙一俵・やいごめ(焼米)・うり・なすび等」の品々が届けられた。京都妙覺寺蔵の真蹟第一紙端書には供養の品名が記されており、別に上包の紙には「御返事」とあつてその下に「ちぶどの(治部殿)のうばごぜんのかへり事□日蓮」とある。治部殿とは中老僧の一人に数えられている治部公日位のこと、その祖母が孟蘭盆についての供餅をして来たことの御返事でもある。但し『録外考文』によれば「建治三年七月十二日賜治部房祖母乃中老位公也。称於妙位尼駿州菴原郡人。後建⁽⁴²⁾等覺寺」とあるので、建治三年の御書とみなしている。爰では、『境妙庵目録』の説、及び真蹟の花押の形態等から、弘安三年説をとる『昭定遺文』にしたがった。「鑿牙」とあるのは白米は鑿^{くさ}の牙に似ているのでこうした文字が使れたようである。鑿は鹿の一種といわれている。目連尊者の母、青提女の物語を中心にして、法華経を信仰する者は、無量生の父母を成仏せしめることができる⁽⁴³⁾と説いている。治部房のことを「父母・祖父・祖母・乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり。あわれいみじき御たからはもたせ給てはします女人かな。彼の竜女は珠をささげて仏となり給ふ。此女人は孫を法華経の行者となしてみちびかれさせ給べし。」と結んでいる。現在真蹟は掛幅六幅で重要文化財の指定を受けている。

翌十四日には、『妙一女御返事』が記されている。妙一女については日昭の縁者に当る「妙一尼」のことであると

されているが、しかし別人であるとの考え方もあり、詳しい事は伝っていない。日朝の写本が伝っているが、内容は即身成仏に関する解説であって、即身成仏を説く天台と真言の二宗につき、その相違を論じられている。結局、真の即身成仏は法華經にかぎるのであって、真言で即身成仏を説くのは、有名無実であると述べられている。内容的にみて、妙一女は宗義についても深い関心をもった人であったように考えられる。尚、十月五日にも『妙一女御返事』があり、この七月十四日の御文に引き続いて、即身成仏に関する論説がみられる。『啓蒙』には「妙一女ノ事健抄ニモ沙汰ナシ、(乃至)真言法華即身成仏ノ違目ヲ遊セリイカサマ智慧アル女人ト見タリ云云⁽⁴⁵⁾」とある。

五、弘安三年の八月

八月に入ると内房女房から、九日が父の百箇日忌に当るので追善供養の御布施料十貫が届けられて来た。その御返事が十四日付で書かれている。本満寺に写本が遺っているが、静岡の内房女房から来た手紙によると、法華經一部、特に方便寿量の二品を三十巻、自我偈は三百巻、唱題五万返を唱え奉ったことがわかる。この点について宗祖は「一返二返唱えて利生を蒙る人粗これ有歟。いまだ五万返の類⁽⁴⁶⁾を聞ず。」と述べている。五万返の唱題とは安易なことではない。父の追善のためとはいえ篤信の徒であったことがわかる。廿八品の功德はこの五字に収められていることを述べ、「大地微塵の一切経は妙法蓮華經の經の一字の所従也。」と説き、更に「五字は悪変じて善となる」ことを示し、「されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人也。石変じて玉と成⁽⁴⁷⁾が如し」と記し、「孝養の至極と申候也。」と唱題による追善供養を讃している。又「輪陀王」の故事を引き、弘法・慈覚・智証等が法華經を第二第三或は戯論と押し下した事などを挙げて、此の邪義が既に一国に弘まり、人々は悪道に落ちて、神威

守護もなき状態であると批判を下している。これは前書と同様に対真言破を中心とした一連の御書ともいえる。

この頃、富士の上野に在る南条家では、男子が誕生した。早速、西谷へその知らせが届き、宗祖は「日若御前」と命名されたのである。二十六日付の『上野殿御返事』によれば、「女子は門をひらく、男子は家をつぐ」という言葉で始り、「財を大千にみてても子なくば誰にかゆづるべき」と述べ、「子ある人を長者」と云い「子なき人を貧人といふ」とも記している。日興の写本が富士大石寺にあるが、宗祖はこうして信徒の子供の名付け親ともなられ信仰上の事柄だけではなく、日常生活の広い方面に渡っても、信徒との交流を深められ、常に男女・親子の在り方についても教示されておられたのであった。

この八月に宗祖は、「俗日重」に対して曼茶羅の授与をなされている。岡宮の光長寺に所蔵されているが、この曼茶羅以後の讃文は「仏滅度後二千二百三十九年」とあって、従来の「二十余年」が最も多く、「三十余年」も併用されているのに比べ、これ以後は専ら「三十余年」と変って来ている。⁽⁴⁹⁾ (つづく)

〔註〕

- (1) 『昭和定本日蓮聖人遺文』日住禪門御返事 一七四三頁
- (2) 『本満寺御書』録外第十五冊 一四九頁
- (3) 『本化聖典大辞林』 二二四九頁
- (4) 『本満寺御書』録外第三冊 二四頁
- (5) 上野殿御返事(昭定) 一七四四頁
- (6) 『法華経・釈迦仏』の御宝前と云う用例が多い。 一五九二頁、一六二〇頁、一七二二頁等照参。
- (7) 上野殿御返事(昭定) 一七四五頁
- (8) 宮城入道殿御返事 一七四六頁
- (9) 『日蓮聖人真蹟集成』(第三卷)によれば、「推定著作年代弘安三年四月十日、弘安四年説(対照録)もある」(三三五)

となつてゐる。

- (10) 『日蓮宗宗学全書』史伝旧記部 二九〇頁
- (11) 『本化別頭仏祖統紀』 卷六一二六頁
但し、文永十一年四月として論じているが、これは誤りである。
- (12) 『御本尊集目録』(山中喜八編著) 一一二頁
- (13) 同 二二四頁
- (14) 同 一二六頁
- (15) 『本化別当仏祖統紀』 卷二五一二頁
- (16) 『御本尊集目録』 一三一頁
- (17) 妙心尼御前御返事 一七四七頁
- (18) 『日蓮辞典』宮崎英修編 二八一頁
- (19) 妙一尼御前御返事 一七四九頁
- (20) 諸経与法華経難易事 一七五一頁
- (21) 新田殿御返事 一七五二頁
- (22) 堀日亨師は「新田殿」について、新田四郎であるとしている。(昭定一七五二頁)
- (23) 窪尼御前御返事 一七五三頁
- (24) 大田殿女房御返事 一七五四頁
- (25) 真跡には年号の記述がないため、弘安三年と推定されている。しかし「縮冊遺文」や「日蓮聖人御遺文講義」等では、建治元年説をとっている。
- (26) 千日尼御返事 一七五九頁
- (27) 「但法華経計り教主釈尊の正言也」(開目抄五三九頁)とあり、更に「開目抄」(五五二頁)に久遠実成の意義が説示されてゐる。
- (28) 開目抄 五三九頁
- (29) 種々物御消息 一五三一頁

- (30) 芋一駄御書 一五五〇頁
- (31) 四条金吾殿御返事 一六六五頁
- (32) 千日尼御返事 一七六〇頁
- (33) 同 一七六五頁
- (34) 松野殿女房御返事 一六五一頁
- (35) 光日房御書 一五六頁
- (36) 阿仏房御書 一四四五頁
- (37) 『日蓮聖人の生涯』(塩田義彦著)六六頁及び『高祖年譜』によれば「登_三山嶺_二仰_三赫々旭日_二高唱_三經王首題_一」(七)とある。『註面談』卷一(二八)『本化別頭高祖伝』(上一二三)にもほぼ同様の記述が見られる。
- (38) 千日尼御返事 一七六二頁
- (39) 上野殿御返事 一七六六頁
- (40) 『録外考文』 四一四八頁
- (41) 浄藏浄眼御消息 一七六八頁
- (42) 『録外考文』 五一二二頁
- (43) 孟蘭盆御書 一七七六頁
- (44) 『本化別頭仏祖統紀』によれば「妙一優婆夷者玉沢昭尊者姉池上朗尊者母也」(廿五―一)とあるのを始めとして、妙一女は富木常忍の娘で南条七郎五郎に嫁し、妙一尼は下総国印東治郎左衛門祐照の妻室で日昭の母であるとすると二人説(門葉縁起)及び、妙一について①日昭の母としての妙一、②乙御前妙一尼、③松野女房としての妙一尼の三人説(境妙目録)をとるものもあり、一定してはいない。『高祖年譜攷異』には、『統紀』の説を疑い、更に旧記の諸説を参考にしながら、妙一尼の「夫文永中為_レ法領_レ命人歟」(中―二九)と述べている。
- (45) 『録内啓蒙』 二九一七四
- (46) 内房女房御返事 一七八四頁
- (47) 同 一七八六頁
- (48) 上野殿御返事 一七九一頁
- (49) 『日蓮聖人真蹟集成』第十卷本尊集解説 三〇頁